

批評家としてのアニータ・ブルックナー

北村 有紀子

I はじめに

現代イギリス作家アニータ・ブルックナー (Anita Brookner, 1928-) の小説については、英語圏を中心にかなりの数の研究がみられるが、彼女の著した批評についてはまだ総合的な検討が行われていない⁽¹⁾。ブルックナーは9冊の美術批評書を発表したほか、実に400件を超える批評記事を新聞や雑誌に寄稿している。それらの記事は、展覧会評や評論なども若干含むが、大半は書評である。批評対象は聖書から18、19世紀のフランス絵画や文学、さらには現代アメリカ小説まで多岐に渡り、その明晰な論理と洞察ゆえに見るべきものが多い。ところがブルックナーの批評記事のうち、1997年に『響』(Soundings) というタイトルで、本のかたちにとまとめて出版されたものは22件にすぎず、それ以外の記事に関しては、いつどの定期刊行物で何について批評したかといった基本的な事実すら不明であった。そこで論者は、ブルックナーによる批評の全体像を把握すべく書誌を作成した。この書誌は、ブルックナーの批評書や、本の一部に収録された批評だけでなく、批評記事をも扱うものであり、ブルックナーが存命中であることから全てを網羅したとは決して言えないが、批評家としてのブルックナーを紹介するためインターネット上で公開している (<http://www.h5.dion.ne.jp/~yu-kita/index.html>)。

本稿では、この書誌をふまえて、1950年代から現在に至るまでにブルックナーが著した批評の流れを考察する。そもそもブルックナーは、文学に深い関心を持つ美術史家であったが、1981年から小説を発表し始め、次第に批評のジャンルにおいても美術から文学へ活動の重点を移すこととなった。したがって、批評家ブルックナーを考える上でも、1981年を境に活動時期を大きく二期に分けるのが妥当であろう。新聞・雑誌記事を含めて検討することによって、ブルックナーが批評家として「文学と美術」という古典的な姉妹芸術にいかに関わってきたかを探り、彼女の小説を支える基盤の一端を明らかにしたい。

II 1955年から1980年まで

美術史家としてのアニータ・ブルックナーの専門は、18、19世紀のフランスのロマン主義絵画である。ブルックナーは、ロンドンのコートールド美術研究所やパリのエコール・デュ・ルーブルで美術史を学び、1964年から1988年までは母校のコートールド美術研究所で教鞭を取っていた。

ブルックナーが初めて書いた批評記事は、1955年にイギリスの美術雑誌「バーリントン・マガジン」に掲載された書評であったと思われる。クリストファー・グレイ『キュービズム美学の論理』を評したその書評において、当時27歳のブルックナーは、次のようにグレイを批判している。

グレイ氏の言葉の使い方に意義を唱えるのは不躰だと思われるが、それでもやはり意義を唱えることにする。というのもこの本は、美術史に関する著作において文体が失われつつあるという嘆かわしい傾向を示す、極端な一例であるからだ。この10年間に、美術鑑定としても文学としても価値のある本が数多く書かれたとは思えない⁽²⁾。

この一節から、美術史家として活動を始めたばかりのブルックナーが「美術史について書かれたものは、文学としても価値がなければならない」という信条を持っていたことがうかがえる。これは、18、19世紀のフランスという、文学者が美術について語ることの盛んになった時代と場所をブルックナーが研究対象としていたことに深く関わっていると考えられる。周知のように当時のフランスでは、ディドロやスタンダールやボードレールといった文学者たちが、戯曲や詩や小説を書きながら、あるいは書く前に、美術批評を手がけ、ある意味で専門の批評家よりもすぐれた批評を数多く残したのであった⁽³⁾。「文学と美術の緊密な交流」は、ブルックナーの最初の書評において既に意識されているテーマであり、後にブルックナーの批評書でも追及される。

なお月刊誌「バーリントン・マガジン」は、1955年から1962年頃まで、ブルックナーが書評や展覧会評を発表する中心的な媒体となる。1956年にはグルーズに関する博士論文の一部⁽⁴⁾を、そして1957年にはジョン・L・スウィーニー編『画家の眼——視覚芸術に関するヘンリー・ジェイムズのメモおよびエッセイ』に関する書評⁽⁵⁾などを寄稿している。また、特に1950年代には、ブルックナーはパリ在住であったため、当地の展覧会評を数多く寄稿し、「最新情報」を伝えた。例えば、1957年にギャラリー・マエおよび国立図書館で開催されたシャガール展や、1958年にオランジュリー美術館で開催された「ワットーからダヴィッドまでのフランスの肖像画」展などについてである⁽⁶⁾。

ところで1950年代といえ、取りも直さずイギリスにおける美術史研究そのものが学問として成熟した時代でもあった。1933年にヴァールブルク研究所がナチスによる迫害を避けて、ドイツのハンブルクからロンドンへ移転したことは、イギリスの美術史学における重要な一つの転機であったが、1950年代にはヴァールブルク学派の薫陶を受けた世代が研究成果を上げるようになったのである⁽⁷⁾。なかでもブルックナーの恩師アンソニー・ブラントは、15-17世紀のフランス、イタリアの美術について多くの業績を挙げ、英王室の絵画顧問やコートールド研究所の所長を務めるなど、強い影響力を持った。ブルックナーは、ブラントの弟子として「バーリントン・マガジン」にデビューしたと考えられる⁽⁸⁾。

さて、ブルックナーは1959年にイギリスへ戻り、1960年代から70年代にかけて、美術史家として実り多い時期を迎える。批評記事の数こそ減少するものの、前述のように1964年からコートールド美術研究所で教授職を務めるようになり、アングル、ダヴィッド、ワットーに関する簡潔で読みやすい本⁽⁹⁾を書くのである。そして1967年から翌年にかけて、ブルックナーは女性として初めて、ケンブリッジ大学スレード美術史講座の担当教授となる。ブルックナーが論じたのは、18、19世紀のフランスの文学者による美術批評についてであり、フランスにおける芸術間交渉の解明に取り組んだ研究として、イギリスでは先駆けとなった。ブルックナーが取り上げた文学者は、デイドロ、スタンダール、ボードレール、ゾラ、ゴンクール兄弟、そしてユイスマンスである。講義内容は、1971年に『未来の天才——フランス美術批評研究』(*The Genius of the Future: Studies in French Art Criticism*)として出版された。その序文においてブルックナーは、美術批評家を総括して「孤独で、自分の仕事の明らかに卑しい性質を恥じ、相対的に創造性に欠けていることを鋭く意識している」と評す一方、自分の取り上げた文学者たちについては「彼らが苦々しさや恨みを持っていないことに、私は感銘を受けた」と記している⁽¹⁰⁾。このような印象は、ブルックナー自身が批評から創作へ向かうヒントになったとも考えられる。以後のブルックナーの批評書としては、1972年に『グルーズ——18世紀現象の盛衰』(*Greuze: The Rise and Fall of an Eighteenth-Century Phenomenon*)が出版され、1974年にはブリティッシュ・アカデミーでの講演内容が『ジャック＝ルイ・ダヴィッドについての個人的見解』(*Jacques-Louis David: A Personal Interpretation*)として出版された。

このように美術史家として成功したと言ってもよい状況のなか、ブルックナーは1975年以降、「タイムズ文芸付録」に書評や展覧会評や評論を数多く寄稿するようになり、イギリスのジャーナリズムに積極的に関わっていく。特にブルックナーは、書評を通してフランス芸術を紹介する役割を果たしていた。例えば1975年にブルックナーが書評を書いたのは、ジャック・J・スペクター『ドラクロワ——サルダナパールの死』、『フランスにおける美術家と作家——ジャン・セズネックに捧げる記念論文集』、ドニ・デイドロ『サロン』第1巻などについてである⁽¹¹⁾。

そして1976年11月からブルックナーは、いよいよ小説の批評を手がけるようになる。ブライアン・ムーアの小説『医者の妻』に関するブルックナーの書評⁽¹²⁾が「タイムズ文芸付録」に掲載されたのである。この小説が『ボヴァリー夫人』の再話であることから、フランス関係の書評を担当していたブルックナーに批評が任されたとも推察される。いずれにせよブルックナーにとっては、後に美術批評から文芸批評へ重点を移す布石となった。1977年には、フランス芸術に関する書評のほか、エリック・シーガル『オリバー・ストーリー』やシドニー・シェルダン『血族』などに関する書評⁽¹³⁾を発表した。1978年には、デイヴィッド・ギャロウェイ『家族のアルバム』およびポール・セロー『写真の館』に関する書評⁽¹⁴⁾も書いたが、ブレント・マクレーンの指摘するように⁽¹⁵⁾、ブルックナーは7年後に発表する自作『結婚式の写真』(*Family and Friends*)にお

いて、写真を用いて小説を展開する手法を模倣することとなる。ブルックナーが批評を通して得た糧を創作に生かしている一例だと言えよう。

ブルックナーの数少ないエッセイの一つ⁽¹⁶⁾によれば、彼女が小説を書き始めたのは、1979年夏のことである。10年がかりで取り組んでいた美術批評書『ジャック＝ルイ・ダヴィッド』(Jacques-Louis David)の原稿を書き上げた後、「人生が間違っただけに進んでいる」と感じて不安に苛まれ、過去の失敗をできるだけ客観的に1枚の紙に書きつけたところ、そのメモが小説の始まりになったという。批評書と小説の執筆に時間を割いたためか、1979年にブルックナーが書いた批評記事は、管見の限り、わずか3件しかない。しかし、1980年には再び「タイムズ文芸付録」に毎月のように書評を寄稿するなど、旺盛な執筆ぶりを示している。特に、メリル・セクレスト『バーナード・ベレンソン伝』や、古代ヘブライ語からの新英語訳『ヨブ記』を書評に取り上げており⁽¹⁷⁾、ユダヤの問題に正面から取り組んだわけではないものの、少なくともユダヤを鑑みる姿勢を示していることは注目に値する。

ブルックナーにとって、1955年から1980年までは、美術史家として研鑽を積み、批評書や批評記事を発表し、業績を築く時期であったと言える。ただし、文学を視野に入れた美術史研究や文芸批評を手がけていたことは無視しえない。ブルックナーは、美術史家から小説家へ突然に転身したのではなく、長い間、文学に関心を持っていたのであり、批評活動を通して「書く」訓練を積んでいたのである。

Ⅲ 1981年から現在まで

では、1981年に第1作『門出』(*A Start in Life*)が出版されてからのブルックナーは、いかなる批評を書いているのだろうか。ブルックナーは、1984年に第4作『秋のホテル』(*Hotel du Lac*)でブッカー賞を獲得しベストセラー作家となるが、批評のジャンルでは1985年まで美術史家の立場に重点を置き、フランス美術に関する書評や展覧会評を書き続けていた。例えば、1984年がワットー生誕300周年であったため、ブルックナーは、ドナルド・ポズナーによる伝記『アントワヌ・ワットー』に関する書評⁽¹⁸⁾を「タイムズ文芸付録」に寄稿したほか、パリのグラン・パレで開催された大規模なワットー展に関する展覧会評⁽¹⁹⁾を「バーリントン・マガジン」に寄稿している。

ブルックナーが本格的に文芸批評に取り組むようになるのは、小説家としてデビューしてから5年後、1986年に週刊誌「スペクテイター」のレギュラー執筆者となり、主に新刊の小説に関する書評を担当するようになってからである。以後ブルックナーは、「オブザーバー」、「インディペンデント・オン・サンデー」、「サンデー・タイムズ」などにも批評活動の場を広げるようになる。

ブルックナーの文芸批評を概観すると、いくつかの特徴を挙げることができる。まず第一に、美術批評では18、19世紀の芸術家に焦点を当てていたのに対し、文芸批評では現代作家を数多く

扱うということである。なかでもブルックナーが最も多く取り上げたのは、アメリカの作家ジョン・アップダイクで、書評が10本ある。1994年3月13日付の「サンデー・タイムズ」紙上のアンケートで、ブルックナーが「現存する最も偉大な英語作家」としてアップダイクを挙げ、その明晰な文体を賞賛していることから明らかなように、アップダイクはブルックナーが崇拝する作家の一人なのである。ブルックナーが書評に取り上げたアップダイクの著作は、『さようならウサギ』など主に小説だが、『見てるだけ——美術に関するエッセイ集』に関しても書評⁽²⁰⁾を書いている。これは、アップダイクが絵画や彫刻などについて書いたエッセイ集で、図版が豊富に添えられており、まさに作家が視覚芸術について語るという趣向のものである。ブルックナーは、アップダイクがエッセイ集を通して「プライベートな美術館」をつくらうとしていると解釈し、アップダイクが「忘れられた漫画家」ラルフ・バートンについて熱っぽく讚美していることを、ボードレールとコンスタンタン・ギースの関係になぞらえて好意的に評価している。

なお、二番目に多くブルックナーが書評に取り上げたのは、2000年にブッカー賞を獲得したカナダの作家マーガレット・アトウッドである。ブルックナーは、1987年にアトウッドの『青い卵の卵』に関する書評⁽²¹⁾を発表したのを皮切りに6作取り上げ、その能力を高く評価し、アトウッドの存在を世に知らせるために一役買った。そのほか、ブルックナーが数回にわたって書評に取り上げた現代作家として、マーガレット・フォスター、フェイ・ウェルドン、アン・タイラーなどを挙げることができる。ブルックナーは、新人作家や不当に評価が低い作家の発掘に熱心な批評家であり、他の批評家が酷評しても、自分が良い作品だと思えば擁護する傾向がある。1995年にカズオ・イシグロの『充たされざる者』が非難にさらされた際には、「スペクテイター」に批判的書評⁽²²⁾が掲載済みであったにもかかわらず、ブルックナーは再考する記事⁽²³⁾を寄せ、『充たされざる者』を「傑作」として擁護し、同作品の評価の流れを変えたのであった。

ブルックナーの文芸批評の特徴として、第二に、1987年以降、ユダヤ系作家を積極的に批評していることが挙げられる。ブルックナーは、ポーランド出身のユダヤ人を両親に持つものの、美術批評においてユダヤ的題材を扱うことはほとんどなかった。エルンスト・ゴンブリッチやユニス・リプトンといった美術史家たちの場合と同様、ブルックナーにとっても「美術」が「ユダヤ」からの逃避の場であったことは否定しきれない⁽²⁴⁾。ただしブルックナーの場合、1987年にソール・ベロウ『心の傷で死ぬ人々』の書評⁽²⁵⁾を書いたことが一つの契機となり、作家や作品のユダヤ的要素に言及しながら批評するようになった⁽²⁶⁾。例えばブルックナーは、シンシア・オジック『ストックホルムのメシア』、アイザック・バシェヴィス・シンガー『ハドソン川の影』、そしてパトリック・モディアノ『1941年。パリの尋ね人』などを書評に取り上げている⁽²⁷⁾。

第三の特徴として、ブルックナーがフランスの「最新状況」を伝えていることが挙げられる。とりわけ1988年以降の「スペクテイター」には毎年、フランスの主な文学賞を獲得した作家について解説した記事を寄せている。また、アルベール・カミュの遺作『最初の人間』など、フラン

スで大きな反響のあった作品については、英訳の出版を待たず、原語のまま紹介している⁽²⁸⁾。

第四に、ブルックナーは、伝記を頻繁に書評に取り上げるのが特徴的である。18世紀以降のイギリスでは伝記が盛んに書かれ、読み物として親しまれてきたのであり、ブルックナーはある仕方では「伝記好きなイギリス人」に同化していると言える。ブルックナーが書評を書いた伝記としては、レオン・エデル『ヘンリー・ジェイムズ伝』、クロード・ピショワ『ボードレール』、ジョージ・ペインター『マルセル・ブルースト』、アクセル・マドセン『ココ・シャネル』、ルース・ブランドン『神聖であること——サラ・ベルナール伝』、フランシーヌ・デュ・プレシス・グレイ『怒りと炎——ルイズ・コレ伝』などがあり⁽²⁹⁾、フランスの芸術家に関する伝記が数多く含まれている。特にブルックナーが「オブザーバー」に伝記の書評を寄稿する場合、人物の写真や肖像画が大きく掲載されることが多く、視覚的に豊かなイメージを提供している。伝記というジャンルは、歴史や文学や批評の要素を含んでおり、文学に深い関心を持ちつつ美術史という一種の歴史を研究していたブルックナーにとって、自らの才能や興味を十二分に発揮できる分野なのではないだろうか。イギリスにはフランスのような偉大な伝記の伝統がない、トリットン・ストレイチーは1918年に嘆いたが⁽³⁰⁾、ブルックナーの紹介する伝記の種類の豊富さと内容の充実度を考慮すると、現代のイギリスでは良質の伝記が多数出版されていると言っても差し支えないだろう。

第五に、ブルックナーの文芸批評の特徴として、書評が随筆もしくは評論のような仕上がりとなる場合の多いことが挙げられる。ロビン・バスがブルックナーの『響』に関して指摘したように⁽³¹⁾、ブルックナーは「本についてよりもむしろトピックについて批評する」傾向があるのだ。特にその傾向が強いのは、ブルックナー自身が思い入れのあるトピックに関する本を書評に取り上げる場合である。例えば、1999年に彼女は、エドモンド・ホワイトによる伝記『ブルースト』の書評⁽³²⁾を「サンデー・タイムズ」に寄稿したが、ブルーストが小説家に示したとブルックナーの考える教訓（すなわち「アウトサイダーとして出発し、どんなに短期間であれインサイダーとなり、最終的には仕事を達成するためアウトサイダーの状態に戻るべきだ」という教訓）や、ブルーストの実体験がいかに関小説に反映されているかなどについて解説することに熱心なあまり、ホワイトやその伝記に関する言及は申し訳程度となってしまっている。しかしながら、ブルックナーが熟知した作家について情熱を傾けて紹介する内容であるだけに、他の批評家による同伝記の書評⁽³³⁾と比較すると、ブルーストの本質に迫って読者の関心をそそのめるのはブルックナーによる記事の方であるように思われる。ちなみに、ブルックナーが純粹な意味での随筆を発表することはほとんどないが、書評のなかに随筆との区別をつけがたいものが含まれている。ブルックナーは、他の作家について論じるかたちをとりながら、自分自身の見解や体験を意外なほど率直に述べるのである。2002年にブルックナーが「スペクテイター」に寄稿した、マーガレット・アトウッド『死者との交渉』に関する書評⁽³⁴⁾では、「書く」という行為には「願望」と「意志」の両方が必要であり、そのプロセスは「無意志的であると同時に恣意的である」などと、作家の根底に関

わる問題について自らの考えを示している。ブルックナーの文芸批評を通して創作の秘密に迫ることは、充分可能だと言えよう。

なおブルックナーは、文芸批評に本格的に取り組むようになって以来、美術批評には距離を置いていたが、2000年には沈黙を破って『ロマン主義とその不満』(*Romanticism and Its Discontents*)を発表した。これは、フランスのロマン主義運動について、絵画、文学、批評の観点から複合的に論じた批評書である。ブルックナーの文章の美しさが賞賛される一方、直観的で論拠に欠ける部分が見られ、注釈や文献目録がなく、批評書としての体裁をとっていないことから論議を醸した⁽³⁵⁾。ただし、絵画や文学が同じ想像力から生まれた別種の芸術であるというロマン主義の考え方⁽³⁶⁾そのものを体現した著作であることは疑う余地がない。また、ブルックナーが依然として美術への関心を失っていないことも、この批評書から明白なのである。

IV むすび

以上、アニータ・ブルックナーによる批評の流れをまとめてみた。ブルックナーは、美術から文学へ批評の重点を移したのであり、批評記事を発表する中心的媒体も「バーリントン・マガジン」から「タイムズ文芸付録」へ、そして「スペクテイター」へと変化した。『ロマン主義とその不満』の出版から推察されるように、近年美術に回帰する傾向も認められる。引き続きブルックナーの批評活動に注目することが必要である。なお、1983年頃からブルックナーは、イーディス・ウォートンやヘンリー・ジェイムズといった作家の小説の序文も書いており⁽³⁷⁾、この種の言説は作家と批判的距離を置いていないため厳密には批評と言えないにしても、作家間の関係を探る上で無視しえない資料であることは間違いない。

ブルックナーが小説家であり、美術史家でもあることはしばしば言及されるが、ジャーナリズムの第一線で活動する批評家でもあると言える。ブルックナーは、18世紀以降のフランス芸術を文学と美術の両面からイギリスで紹介する役割を担ってきたのであり、さらには現代の英語作家による新しい文学作品にも先鋭な批評意識を向けているのである。そもそもブルックナーは美術史家として、すなわちエクブラシスの専門家として、つねに言葉によって作品を描写し表現する必要があった。ブルックナーにとって美術史家として批評の仕事をした経験は、後に文芸批評や創作に携わる上で重要な意味を持ったと考えられる。今後は、美術と文学の相関関係に留意しつつ、ブルックナーにおける批評と小説の関連性を綿密に検討することが大きな課題となる⁽³⁸⁾。

注

(1) ブルックナーの美術批評に関しては、以下の文献で紹介されている。

クレア・ヒューズ、「第10章 美術史家としてのアニータ・ブルックナー」、北條文緒訳、現代女性作家研究会編『アニータ・ブルックナー——孤独のプリズム』(勁草書房、1991年)、229-42頁。Clair Hughes, "Anita Brookner: Art Historian and Novelist," 『人文科学研究』、国際基督教大学、第24号(1992年)、117-30頁。

- (2) Anita Brookner, "The Literature of Art," *Burlington Magazine* May 1955: 122.
- (3) フランスにおける文学者と美術批評の関係については、主に下記を参照。
Helen O. Borowitz, *The Impact of Art on French Literature: From de Scudéry to Proust* (Newark: University of Delaware Press, 1985); Peter Collier and Robert Lethbridge, eds., *Artistic Relations: Literature and the Visual Arts in Nineteenth-Century France* (New Haven and London: Yale UP, 1994).
- (4) Anita Brookner, "Jean-Baptiste Greuze," *Burlington Magazine* May 1956: 157-62; June 1956: 192-9.
- (5) Anita Brookner, "The Literature of Art," *Burlington Magazine* June 1957: 213-4.
- (6) Anita Brookner, "Current and Forthcoming Exhibitions: Paris," *Burlington Magazine* August 1957: 287-8; Feb. 1958: 69.
- (7) Miranda Carter, *Anthony Blunt: His Lives* (London: Macmillan, 2001) 359-60.
- (8) Carter, 327.
- (9) Anita Brookner, *J. A. Dominique Ingres* (London: Purnell, 1965); *David* (London: Purnell, 1967); *Watteau* (London: Hamlyn, 1968).
- (10) Anita Brookner, *The Genius of the Future: Studies in French Art Criticism* (London: Phaidon, 1971) 2.
- (11) Anita Brookner, "Dark Ghost on a Tilting Bed," *Times Literary Supplement* 10 Jan. 1975: 35; "The Story and the Image," *TLS* 21 March 1975: 300; "The Rethoric of of Sensations," *TLS* 3 Oct. 1975: 1139.
- (12) Anita Brookner, "The Pleasure Principle," *TLS* 19 Nov. 1976: 1445.
- (13) Anita Brookner, "What Marcie Knew," *TLS* 13 May 1977: 581; "Executive Sweetie," *TLS* 7 April 1978: 369.
- (14) Anita Brookner, "Sight Unseen," *TLS* 8 Sep. 1978: 985.
- (15) Brent MacLaine, "Photofiction as Family Album: David Galloway, Paul Theroux and Anita Brookner," *Mosaic: A Journal for the Interdisciplinary Study of Literature* 24.2 (1991): 131-49.
- (16) Anita Brookner, "On Writing a First Novel," *The Writer* Aug. 1981: 5-6.
- (17) Anita Brookner, "The Master of the Attributions," *TLS* 18 Jan. 1980: 51-2; "God's Great Wager," *TLS* 26 Dec. 1980: 1457.
- (18) Anita Brookner, "Day-Trips to Cythera," *TLS* 23 March 1984: 299-300.
- (19) Anita Brookner, "Exhibition Reviews: Paris: Antoine Watteau, 1684-1721," *Burlington Magazine* Feb. 1985: 116-7.
- (20) Anita Brookner, "Novelist's Imaginary Museum," *Observer* 29 Oct. 1989: 49.
- (21) Anita Brookner, "A Girl's Best Subject Is Her Mother," *The Spectator* 6 June 1987: 37.
- (22) Alan Wall, "A Long Look at Nothing Much," *The Spectator* 13 May 1995: 45.
- (23) Anita Brookner, "A Superb Achievement: A Reconsideration of Kazuo Ishiguro's Unappreciated Novel, *The Unconsoled*," *The Spectator* 24 June 1995: 40-1.
- (24) ユダヤと美術の関係については、主に下記を参照。
Sousloff, Catherine M., ed., *Jewish Identity in Modern Art History*, Berkeley: University of California Press, 1999. 「西洋美術研究」No.4、特集——美術史とユダヤ、三元社、2000年9月。
- (25) Anita Brookner, "The Depth of His Potato Love," *The Spectator* 31 Oct. 1987: 36-7.
- (26) 拙稿「アニータ・ブルックナーとソール・ペロウ——ユダヤ性の表出」(「比較文学年誌」第38号、早稲田大学比較文学研究室、2002年、137-51頁)を参照。
- (27) Anita Brookner, "Things Past and Things Passed on," *The Spectator* 16 Jan. 1988: 29-30; "A Detective of the Past," *The Spectator* 7 June 1997: 49; "In the Steps of Zola," *The Spectator* 6 June 1998: 31-2.
- (28) Anita Brookner, "Even Less Fiction than Stranger," *The Spectator* 14 May 1994: 40-1.
- (29) Anita Brookner, "The Madness of Art," *The Spectator* 1 Aug. 1987: 28-9; "Decline and Fall of a Dandy," *The Spectator* 1 July 1989: 23-4; "The Chink of a Spoon," *Observer* 13 Aug. 1989: 41; "An Eternal Mademoiselle,"

Observer 7 Oct. 1990: 61; "All the World Her Stage," *Observer* 14 July 1991: 63; "On High Heels Up Vesuvius," *London Review of Books* 21 July 1994: 18.

- (30) Lytton Strachey, *Eminent Victorians* (London: Chatto and Windus, 1928) viii.
- (31) Robin Buss, "Telling Gros from Greuze," *Independent* 19 Oct. 1997: 36.
- (32) Anita Brookner, "Why Does Proust Matter?," *Sunday Times* 7 Feb. 1999: 5.
- (33) Jeremy Reed, "Marcel's Eternal Madeleine," *Times* 25 Feb. 1999: 42. および Robert McCrum, "Home to Proust," *Observer* 28 Feb. 1999: 11. など。
- (34) Anita Brookner, "I'm the Other One," *The Spectator* 9 March 2002: 44-5.
- (35) Waldemar Januszczak, "All Passion Spent," *Sunday Times* 3 Sep. 2000: 9; Tim Hilton, "Love at the National Gallery: A Brief Sighting of an Unusual, Difficult Book," *Independent* 10 Sep. 2000: 53; Patrice Higonnet, "Artists of Infinite Longing," *TLS* 3 Nov. 2000: 16. など。
- (36) 三浦篤「美術史学から見た比較芸術論 (上)」、「比較文学研究」、東京大学比較文学会、第77号 (2001年)、86頁。
- (37) ブルックナーが序文を書いた小説に関しては、本稿の冒頭で紹介したサイトのなかでも特に下記のページを参照されたい。
<http://www.h5.dion.ne.jp/~yu-kita/conbooks.html>
- (38) シッカートの絵画についての批評を含むブルックナーの小説 *A Private View* (1994) に関しては、拙稿「アニータ・ブルックナー『展覧会内覧』とウォルター・リチャード・シッカートの絵画」(『英文学』第82号、早稲田大学英文学会、2001年、16-30頁)を参照。

本稿は、2002年度早稲田大学特定課題研究助成費(2002A-823)を受けて作成したものである。